『吾輩は猫である』金田夫妻の顔

Junko Higasa

まず、金田夫妻の顔の特徴を見てみよう。

■夫人の顔の描写（第三章）
『抜け上った生え際から前髪が堤防工事のように高く聳えて、少なくとも顔の長さの二分の一だけ天に向ってせり出している。眼が切り通しの坂位な勾配で、直線に釣るし上げられて左右に対立する。直線とは鯨より細いという形容である。鼻だけはむやみに大きい。人の鼻を盗んで来て顔の真中へ据え付けたように見える。三坪ほどの小庭へ招魂社の石燈籠を移した時の如く、独りで幅を利かしているが、何となく落ち付かない』
（苦沙弥先生曰く）『夫を剋する顔という相だ』
（迷亭曰く）『十九世紀で売れ残って、二十世紀で店曝(たなざら)しに逢うという相だ』

■夫の顔の描写（第四章）
『金田君は妻君に似合わず鼻の低い男である。単に鼻のみではない、顔全体が低い。小供の時分喧嘩をして、餓鬼大将のために頸筋(くびすじ)を捉(つら)まえられて、うんと精一杯に土塀へ圧(お)し付けられた時の顔が四十年後の今日(こんにち)まで、因果をなしておりはせぬかと怪(あやし)まるる位平坦な顔である。至極穏かで危険のない顔には相違ないが、何となく変化に乏しい。いくら怒っても平(たいら)かな顔である』

夫人の髪型は二百三高地。眼は「人馬の交通を行えるようにするが、簡単に攻め入らせない」という二面を持つ切り通し。鼻には「男」という概念を象徴した招魂社の石燈籠を据えている。総合すれば、日露戦争に出兵した男たちの形容である。彼らは命という財産を国に差し出した。物質よりも精神を象徴する。

一方、夫の顔は子供の頃からひ弱で、顔同様、国の求める向上心も低い、出兵しなかった男の形容である。所有する財産を元手に、戦争によってさらに儲け、生活は安定して平らかなかわりに、精神的にも平らなままで発展性がない。

この二人の顔は、精神面で女性が強くなり、男が軟弱化していく日本の社会を映している。「夫を剋する顔」とは、社会的地位向上のために男と「対立」する新時代の女性の様相を呈し、男に「打ち勝って」夫に座り心地の良い平らな座布団状態を維持させるという相である。

そして 19 世紀後半、英国では女性解放運動により女性の地位向上本格化の兆しが見えた。しかし女性の環境と能力が男に追いつくまでには遠い。この状況が金田夫人の顔に表れている。男の鼻を盗んで顔の真中に据え付け、男同様に幅を利かせても何となく落ち着かない。それは外観だけ模しても、内面が伴っていないからだ。このような 19 世紀の顔は売れ残って、20 世紀には店晒しに逢う相だ。これは文学においても共通の真理だ。西洋の形を真似ても、西洋と同等の中身が伴っていなければ、売れ残って店晒しに逢うだろう。漱石は西洋の形と東洋の中身を融合させていく。(2020.9.22)